



# 占い



ナカノリエ

「あなた、子どもは3人ね。女の子が活躍するわよ。」  
目の前の占い師が言った。  
そんな遠い話を聞きに来たわけではないのに、不思議な説得力があった。

今日、ここへ辿り着いたのは、どうしてだろう。  
絵を描きたい。  
そう思って、大学を辞めることにしたのはいい。  
でも、絵を描くならここと決めていた画塾があった。  
今日はその審査の日だったのだ。  
どうも、納得のいく絵が描けたようには思えない。  
けれど時間いっぱいになり、押し出されるように画塾を後にした。

ここ数日、何枚も何枚も絵を描いた。  
突然、予報よりも早く梅雨が明け、炎天下がやってきた。  
あまり食欲がなかった。  
絵ばかり描いていた。  
「ああ、おかゆが食べたい。」  
まっすぐ帰ったって仕方ない、おかゆを食べて帰ろう、そう思って中華街へ行った。  
画塾から今住んでいるアパートへ少しだけ遠回りすれば、中華街へ電車は運んでくれる。  
一口食べて、正解だったなと思った。  
味の付いたおかゆは、炎天下で汗だくの今日のような日にはもってこいだ。  
ここしばらく食欲がなかったから、おかゆならお腹もびっくりしないだろう。  
あっという間に食べ終わってしまった。  
中華街へは、3つのルートがある。  
散歩がてら今度は違う駅から帰ろう。  
そうして歩いていると、占いの看板にでくわした。

占い、その看板を見ていると、ちょうどお母さんくらいの年代のおばさんが、  
にっこりきっぱり、声をかけてくる。  
「よかったら、ここに座って」  
「いくらですか？」  
「本当は3000円なんだけど、あなたに惹かれたから1000円」  
「あ、ありがとうございます」  
言いかけているうちに、腰かけていた。

「ここに名前と、生年月日を書いてくれるかしら」  
ごく普通のコピー用紙とボールペンを差し出された。  
何で占うのかはよくわからないけれど、30cm定規で線を引き出し、  
各パーツにあれこれ書き始めた。  
「うーん、結構、頑張ってきたわね、いい調子よ、今のままそのままでもいい。  
子どもは3人ね、女の子が活躍するわよ。」  
「あのう、結婚はしますか？」  
「もちろん結婚するわよ。あなた、前から何か続けているわね、これはこのまま続けて、変えたりしないでいいから。」  
「はい。」  
「今日はね、いい先生がお越しになってるの、よかったら見てもらって帰らない？」  
「あ、でも、そんなにお金持ってないんで。」  
「いいわよ、1000円にしてくれるように頼んであげるから」  
促されて、建物の中へ入る。  
大丈夫なのかな。  
ガラス張りの建物は観光客でいっぱいだ。  
危険な感じはしないけど、今日の私は、流れるままだな。

「はい、手を広げて見せて」  
今度は少し怪しそうな、さっきよりは年配の人だった。  
「子どもは3人、女の子が活躍するわよ。」  
「これはこのまま続けて、変えたりしないでいいから。」  
さっきの占い師さんが言ってくれたことが頭の中を繰り返していて、  
目の前のおばさんの話が頭に入ってこない。  
「はい、じゃあ、1000円。」  
あっと思った時には話が終わっていた。  
そして、さっきのおばさんは名前を書いた紙をそのまま渡してくれたけど、  
このおばさんは話しかけていないから、何もわからない。  
でも、まあいいか、一階のおばさんが感じが良かったし。  
そう思いながら階段を降りて、本当に3000円だったのかはわからないけれど、  
おまけしてくれて、そしてなんだか元気になった不思議な占いにお礼が言いたくて、  
入口のそばのさっきのテーブルを探すけれど見当たらない。  
不思議だな。

今度は予定は変更せず、地下鉄に揺られ、アパートへ帰った。  
「暑いなー、もう夏になっちゃうなんて。」

一週間ほだし、大家さんの声がした。  
「サヤちゃん、なんか郵便届いてるわよー。」  
二階の部屋から降りてみると、郵便屋さんが立っていた。  
「書留ですので、印鑑を」  
書留？慌てて部屋に戻って、印鑑を取ってくる。  
「ありがとうございました」  
郵便バイクの音が遠くなっていく。  
部屋へ駆け上がる、封を開ける。  
「招待状 貴殿を我が画塾の一員とする。」  
一枚のシンプルなカードに、そんな小洒落た文句がタイプされていた。  
「やったー！」  
サヤは足をバタバタさせて、コンビニへ走った。

今日は祝杯、うちに来て！と、なおにメールを打った。